

答：大久保

もし具体的にどの例とご指摘いただければ、何かお話しできるかと思いますが…？

問：金

スライドの最後の4枚目に蘭の花が刺繍されていましたね。

答：大久保

一番最後のは紺色に竹の模様の実物ですが、その前の帯に蘭とか竹の模様が表されている例ですか…。

問：金

時代の反映にも関わってくるんですか？

答：大久保

蘭や竹は文人画の題材の墨蘭とか墨竹から来ているものだと思うのです。実際に絵として墨蘭や墨竹が描かれて、それを文様として絵そっくりに写したということだと思います。ご指摘のようにただ絵の美しさや線の妙味を写す、鑑賞するというだけではなく、本来、墨蘭、墨竹、最後の竹の文様もそうですが、文人画の画題としてそもそも選ばれた所以である、ある種の精神性を尊ぶという意味があつて衣服の文様として選ばれているのだらうと思います。基本的には。

問：金

植物の木や花の模様以外の模様はあつたのでしょうか？

答：大久保

今日お話ししたのは、そういう植物などの模様だけではなくて、いちばん自然とは遠いような判この模様がたくさん出てくるというようなこととお話をしたわけです。近世の服飾の文様にどんなものが題材にされるかといいますと、文様にならないものはないというくらいいろいろなものがあります。先ほどの腮尾さんのご発表にも絵銭の模様が衣服に出てくるという例がありましたし、そういう器物の文様、非常に微少な印章の細かい文字まで再現するような文様から、写生的な植物などの文様まで幅広くあるといえると思います。

## 司会者のまとめ

小池 三枝

服飾は日常的な生活に根ざし、つねに人間の心身のありようと密接にかかわりながら、さまざまな国・民族・地域などの歴史のなかで、時代とともに形を変えて続いてきた。

歴史的・文化的な側面から考えると、日本の服飾は、古代から、ある場合には慣習や儀礼に結びついて形式を整え、ある場合には文学作品や絵画などに描かれて、心情表現や人物描写の役割を担ってきた。文学や絵画だけでなく、舞踊・演劇・芸能などの諸芸術において、服飾は個別的な表現として、あるいは記号的な表現として効果的に用いられている。このような服飾は、それ自体が独自に変化交替してきたのではなく、服飾（人間）をとりまくさまざまな文化現象と相互的な影響関係を保ちつつ今日に至っている。

この分科会では、時代の異なる三種の研究報告をとおして、日本人が服飾に求めたものは何か、過去の服飾事象から読み取れることは何か、という日本の服飾文化史の視点を紹介した。その一は、日本人が服飾に託した心情を和歌によって考え、その二は、近世後期の服飾意匠にみられる趣向を文学や歌舞伎や書画などとの交流のなかで捉え、その三は明治後期に顕著な好尚とその周辺について多様な資料を用いて考察したものである。

服飾研究には、服飾そのもの（実物資料）の調査が大切であることはいままでもないが、残されている資料は極めて少ないので、どういう人がどのように着たのか、着る人の心情とどう関わったかを知るうえでは、記述され表現された資料についての綿密な考察が欠かせない。しかし、いろいろな資料に散見される服飾の記述・表現を可能な限り多く集めながら、その意味するところを明らかにし、ある時代の様相を把握するのは容易な作業ではない。そのためもあって、これまで他分野の研究者の服飾にたいする関心は、かなり薄かったように思われる。たとえば、小野小町や在原業平など六歌仙の姿をいわゆる十二単や直衣などで思い浮かべるのは誤りで、奈良時代の服装に近いのだというような事柄さえ、一般には理解されていない現状である。

したがって今回のシンポジウムでは、服飾研究の一端を、隣接する他分野の人達に分かりやすい形でまず紹介することを意図した。参加者は文学関係の研究者が多かったように見受けられ、二、三の質問もその人達からであった。今後この種の交流の機会が増せば、双方の分野にとって新しい発見が得られることと思う。